

令和6年度 釧路定住自立圏に関する意見交換会
会議要旨

- 日時 令和7年2月26日（水）午前11時00分～12時00分
- 場所 釧路市役所 防災庁舎5階 災害対策本部室
- 出席 別紙名簿のとおり

○：事務局 / ●：首長等

1 開会

2 挨拶（市長）

3 釧路定住自立圏共生ビジョンの策定状況について

○事務局から説明（資料1、資料2）

- ・質問意見なし

4 意見交換「圏域で連携した医師や看護師等の不足対策について」

●鶴間釧路市長

- ・釧路地域の医療環境は、釧路市医師会を中心とした医師や看護師などの医療従事者のご尽力により、安定的な救急医療・地域医療体制が維持されているが、釧路地域は「医師少数区域」に該当するなど、医師不足が顕在化しており、特に、精神科・小児科の医師確保は困難を極めている状況となっている。
- ・高度急性期医療を担う市立釧路総合病院においては、医師の定数は満たしているものの、医師が充足しているとは言えない状況であり、看護師についても令和3年度以降、退職者が採用者を上回る状態が続いており、新棟供用開始も控えていることから、医師・看護師の確保及び離職防止の取組が求められている状況となっている。
- ・また、地域医療体制を支える看護師を養成する看護学校の維持運営は大変重要であるものの、釧路市立高等看護学院においては、今年度の入学者数が定員を下回るなど、市内の4つの看護学校における入学者数は減少傾向となっており、看護師の養成に向けた取組を進めるうえでも、入学者の確保の取組も必要となっている。
- ・当市としても持続可能な地域医療提供体制の構築を最優先の重要事項と捉

え、令和5年4月より、新たな精神科・小児科の診療所等の開設に係る補助金制度「釧路市診療所等開設助成金」の創設や、看護師の確保のため、看護学校の訪問や就職説明会の開催、インターンシップを始めとした実習・見学の受入等に取り組んでいるところでございます。

- ・令和6年3月に北海道が策定した「北海道医療計画」では、二次医療圏として21名の医師の追加確保が必要とされており、各医療施設による医師確保の取組と併せて、管内連携による医師確保の取組も大切であると考えておりますので、今後も国や北海道に対し、医師確保対策の充実、並びに看護師不足の解消及び看護師の養成に向けた取組の推進等について働き掛けていくとともに、中心市として地域の重要課題の解決に向けて、取り組んで参りたいと考えています。

●若狭厚岸町長

- ・町立厚岸病院は、地域で唯一、入院機能を有し、透析医療を提供する医療機関でもあり、医師及び看護師の確保が重要な課題となっている。
- ・このままでは救急医療のみならず一般診療にも影響を及ぼす恐れがある。
- ・札幌医療大学が法人化されたが、かつては道立の学校であったことから、地方への派遣ができる体制を作っているが、効果が出ていない。
- ・看護師確保も大変であり、医師の派遣会社に看護師の派遣を依頼している状況。
- ・厚岸町としても独自の奨学金制度を創設したが、奨学金を利用しても地元に戻ってこない。
- ・コロナ前後での医療人材の確保は全く違うものになっている。国の問題でもあるが、地域医療の重要性を考えていただきたい。

●齊藤浜中町長

- ・町立浜中診療所では、病床を19床確保しており、北大からの派遣もあり、常勤医2名を確保できている。
- ・町立厚岸病院とも連携し夜間休日の医療体制の確保を行っている。
- ・看護師は募集をかけても集まらない状況にあり、看護助手が月に数回従事することがあるが、救急対応が困難となり、対応範囲が狭まってしまっている。
- ・少子高齢化や人口減少を考えると抜本的な改革が必要と考えている。
- ・看護師を募集した際に雇用にはつながっているが、圏域内の他の病院との取り合いとなってしまっている。
- ・釧路市内に看護学校はあるが、市内に残っていないと聞いている。こういった流れを止めるべく医療圏の強化が必要と考える。

●佐藤標茶町長

- ・町立病院が唯一の医療機関であり、医師・看護師の確保を確保していかなければならない。内科医3名、看護師も定数を確保できているが、救急の受入を止める止めたこともある。
- ・平成20年度から北海道の地域枠制度が創設され、いつか標茶にも来ると思っていたが、一向に来る気配がない。
- ・9年間の研修を受ければ奨学金が免除され、4年間は臨床研修病院等で研修を行うもので、1,000人程度が道内のどこかで働いているが、標茶には来ていない。
- ・地域枠の医師が研修を受ける体制を確保することは困難であり、市立病院を核にし、道にも協力してもらいながら、管内に派遣していくような緩やかな連携を実現できないか。
- ・常勤医の労働環境を改善するため、夜間等の医師を確保するため、東京から来てもらっている状況であり、持ち出しも大きい。
- ・本州では連携の事例もあるため参考にしながら、道にも協力いただきながら、検討いただきたい。

●徳永弟子屈町長

- ・個人開業医が高齢により閉院し、摩周厚生病院を中心に医療体制を確保している。
- ・JA厚生連の協力を得ながら、人口6,500人に対して、医師9名を確保できている。
- ・医師や看護師の高齢化が顕著になっているところから、移住・定住の側面からの地域の魅力発信も重要になってくると考える。
- ・オンライン診療や処方箋など管内の広域連携を考えていければ。

●大石鶴居村長

- ・指定管理者制度を活用し、村立診療所の運営を行い、医師や看護師の確保につなげている。
- ・昨年9月末に、つるい養生邑病院が医師の体調不良により休止しており、内科、病床134床があったが、なくなってしまう地域としても大きなダメージを受けている。
- ・看護師も30名ほどいたが、札幌に行ったり釧路市内の病院に転出したり、働いていない看護師もいると聞いている。
- ・地域の声としても小児科の対応が弱い事に対しての親の不安が大きくなってきている。
- ・介護事業所が一緒にあり、安心感があったが、老人保健施設には医師を置かなければならず、経営状況が厳しくなっている。

- ・ 昨年、電子カルテの導入を行ったところであるが、釧路市内の病院との連携も重要になると考えている。

○釧路市都市経営課

- ・ 本日、欠席となった釧路町、白糠町から提出された内容を説明する。
- ・ 釧路町からの課題感は、医師の高齢化が進んでいることが課題のひとつであると考えていること、当町においては、生活圏を共有する近隣市町村と地域医療体制を構築しているが、特に中心部から離れた地域においては、地域医療を担う医療機関の役割がより重要なものとなっている。
- ・ 白糠町からは北海道は医育大学が少ないこと。道内の医育大学を卒業後、道内で勤務せず、都市部に流出してしまうことが課題と提出があった。

●若狭厚岸町長

- ・ 町立病院での手術をやめてから、釧路市内の病院には大変お世話になっている。釧路市は恵まれていると思われるが、内部事情は厳しいと思われる。
- ・ 町立病院も経営が大変で医師の確保は6人必要だが、3人しかいない。固定費が経営を圧迫してしまうため、どのように解消していけばよいか。
- ・ 過去に期成会の要望として、国立医科大学の誘致を行っていたが、結果的には旭川に行ってしまう、広域な北海道内に1つしか国立大学がない状況となっている。
- ・ 釧路も強く要望をしていたことから、釧路に医科大学を誘致しても良いのではないか。
- ・ 医師確保として現在も要請活動を進めているが、どのように確保していくか皆さんの話を聞くと地域枠を徹底してもらいたいと共通している。
- ・ 医師の定年延長などにより経営を維持している状況だが、これも経営を圧迫している状況であり、命と健康のためにも仕方がないが、大きな事業にも支障が出てきている。

●振興局石井保健環境部長

- ・ 医師会の先生達の話を見ると厳しい環境でも連携して取り組まれていると感じている。
- ・ 医師、看護師不足の前提として、少子化の現状がとてつもなく、医療系の職種では医学部以外は定員割れしている状況にあり、高校卒業数も10年で3割減少している。
- ・ 私札幌医科大学で年2回講義をすることがあるが、雰囲気が変わってきていると感じており、地域枠を厳しくしたいが、卒業と同時に奨学金を返済して辞める人もいる。
- ・ 医学部に入る人は裕福な家庭の人が多く、地域に貢献させようと先生たちも頑張

っているが、期待に添えていなく申し訳なく思っている。

- ・釧路市内の病院でも初期認証研修医の確保に努力しており、定員近い人数が集まっており、釧路での研修は好評であるが、難点は札幌から遠い点となっており、道東道も開通されたことから、期待していきたい。
- ・初期研修プログラムを地域と連携して実施することにより、手厚く扱って将来に繋げてもらいたい。
- ・看護師は厳しい状況であり、毎年、看護師不足による病棟閉鎖が続いている。管内の卒業生は3～4割は管内に就職しているが、入学数が確保できない状況であり、少子化と大学進学率の上昇が影響し、看護大学に行かれる人が多い。
- ・北海道では薬剤師の確保計画の策定を進めており、管内でも病院で働く薬剤師が30人程度不足している。
- ・医師会からは事務職員の確保も大変と言われており、資格者に限らず医療関係の仕事に魅力を感じてもらう必要がある。
- ・北海道内に医療圏域が21あり、釧路市内には大きい病院もあり、恵まれた環境とみられがちだが、根室地域からの患者も受け入れており釧路根地区の医療を支えている点から負荷がかかっている。
- ・現在、国の地域医療構想等の検討会において、重点医師偏在対策支援区域(仮称)の指定を検討しており、釧路管内も重点地域に指定させるようお力添えをいただきたい。

●鶴間釧路市長

- ・重点医師偏在対策支援区域(仮称)を目指すため、期成会も含めてお力添えをいただきたい。
- ・研修医の地域派遣については、市立病院にも検討を促していきたい。
- ・看護師の大学進学増加は私も把握しており、高校を卒業した1割が看護大学に進学しているが、札幌の大学などに進学すると地元に戻ってこない。
- ・市内4つの看護学校については、R6年度の入学者数が定員140人に対して、80人となっており、特に孝仁会と医師会は厳しい状況になっている。
- ・市内にも4年生の看護大学があれば。

●佐藤標茶町長

- ・市立病院が核となりながら緩やかな連携をとる、北海道の協力も必要になるが、現状を分かっておきながら、対応してきていないはず。
- ・地域枠の医師を厚くするなどアクションを起こしてもらいたい。

●鶴間釧路市長

- ・札幌圏でも救急の地域枠は足りないと言われている。

●徳永弟子屈町長

- ・釧路市には大きな病院がありお世話になっており、連携しながら取り組んでいきたい。
- ・個人病院は元気があれば高齢でも続けられるため、週に3日でも構わないから続けてもらいたい。
- ・住民にもしっかりと責任をもってもらい、皆で協力して充足率を維持していきたい。

●若狭厚岸町長

- ・中心市である釧路市がしっかりと医師確保の流れを作る必要がある。労災からでも週や月に数回でも構わないので、派遣するように病院にも頑張ってもらいたい。
- ・自立圏のあり方として、成果が出るよう中心市として頑張ってもらいたい。

●鶴間釧路市長

- ・頑張りたいと思っているが、市立病院は釧根からの救急も受けており、年間の残業時間も特例を受けて対応してくれている状況。
- ・精神科も閉院の影響により患者が多くなっている。限界に近い位頑張ってくれている。
- ・現状が良くなるように医師の働く環境の整備なども進めていきたい。

●若狭厚岸町長

- ・市立病院が大変なのは理解するが、市立病院以外にも病院はあるため、中心市としての役割は大きいと思われる。

●振興局石井環境生活部長

- ・市立病院の先生方も頑張ってくれているが、慢性期で外来利用する人も多くいるため、身近な医療は地元の医療機関を使ってもらうなど、ご協力をお願いしたい。
- ・4年制看護大学については、現在、函館で議論されているが、作るのに4年かかると言われている。

以上